

夢をもち、人生を創造的に生きる力を培う教育を

遠藤 友麗

今や学校は選ばれる時代となりつつある中、未来社会に有効に生きる豊かな心と感性・能力を備えた人材育成に向けて共通性の中にも独自性を打ち出すときである。そのキーワードは、「豊かな人間の基となる①知・創造力・感性の育成 ②夢・感動の育成 ③規則・ルールの遵守、他者への配慮を教える教育」の徹底であろう。

人はそれぞれに個別の人格を備え、個性を生かし人生をよりよく生き自己実現を果たすとともに、社会の一員として共生し他者に貢献できることに喜びをもって生きる唯一の動物である。その唯一の動物が教育を受けることで一層有能無二の人間となる。

“はじめに子ども在りき・子どもは未来の創造者(フューチャークリエイター)”

学校教育は勉強させる為に在るのではなく、子ども一人一人が未来に向けて創造的に自己実現を図っていくための豊かな資質・能力、心性・態度などを身につけさせ、有効な自己開発・自己創造を援助するために施される。また知識知のみでは生きて働く真の知にはならず、知識が実感として“感じ取る心と一体に融合して初めて真の体得知”になっていく。即ち、知っていることと実感して分かる、できることとの融合・合一を目指すことが大切になる。このことを基盤として学校は学ぶ主体である子どもの声や保護者の願い・意見などに耳と目と心を傾け、現状から問題点を分析し「自分の生き方に夢と勇気を持ち全人的な発達と大志をもった豊かな自己実現及び創造的に学び続け、心豊かな社会生活を送るに必要な基礎学力をはじめとする諸能力や態度、道徳性、感性などを身につけさせる学校」へと改善が求められる。

1 子どもは大人を見て育つ

(今も昔も人間は変わらない)

人間は生まれながらには野生であり、その後の経験と教育によって思考、判断、人格、感性、行為の傾向など“人

間としての資質・能力”が形成されていく。

子どもの本質は今も昔も変わらない。大人の行為・考え方を見て育つ。子どもは育てたように育つ。見たことをまね、教わることで考え経験し議論を交わし合って自分の考えが磨かれ人格やものの考え方が形成される。若者たちの姿や考えは間違いなく大人社会の反映である。家庭・地域は子どもの夢や健やかな成長と社会性を育む苗床である。

苗は自分の力で成長するが生育環境の質によって左右される。放置された荒地や養分の偏った土壌、小さな鉢や苗床では決して豊かな実りをもたらさない。いろいろな草や虫や動物が共生し、雨も嵐も日照りもある自然の大地の中で多様な経験をしつつゆっくり育った苗はやがて豊かな実りを迎える。子どもは大人の行為をまねて育つ。子育ての苗床づくりや草むしりは確かなしつけと豊かな知や感性、心と愛情を育む土壌づくりであり家庭・地域の役割である。特に幼児・児童期の子育て教育は基本的には各家庭が行うものである。言葉で教えることよりまねをさせ見習わせて教えることが大切。

しかし近年は幼児の教育まで幼稚園・保育園にお任せになり、親自体が子どもの教育をあまりせず園や学校に任せ、勝手な苦情や要求を言ってくる状況が多くなってきている。その「苗床教育の弱体化」が、多発する勝手な態度・規則・ルールの無視、問題行動・非行・凶悪犯罪の若年化、自己の責任回避と他者への転嫁などの問題の原因になっている。しかし、それらは大人たちも含め社会一般に見られる現象であることを自覚し、まず我々大人たちが「子育て共同体・子どもの手本意識」を深め、率先して襟を正し、子どもに具体の生き方の手本となる態度を実践して見習わせる教育をしていかなければならない。

2 最近の社会に見られる「五つの喪失(ファイブ・ノン)現象」

これら現代社会の喪失現象の根本原因は幼児期・児童

期・少年期(苗床教育時)の親の養育態度と親自身の生き方観や責任感の希薄化、学力一辺倒の教育価値観などと大きく関係している。以下に特に問題が大きい「五つの喪失現象」を以下に示す。

①夢や感動、大志・情熱の喪失

- ・将来の自分の夢もまだもてない時期から入試という画一的な学力競争のゴールに一斉に走らされる少・青年期。入試が終われば虚無感と疲れが残る、後は夢や大志と情熱をかけるチャレンジ目標をもてず、できるだけ楽しく過ごしていこうとする人生観。
- ・無心で楽しく創意工夫にあふれる自然遊び・友達遊びができない子ども時代、友達関係がうまく築けない。みんな汗してわいわいと遊びまわることができない。
- ・物質的・金銭的に何でも満たされ不足感がなく、自分の努力で得なければならぬものがない。金さえあれば何でも満たされるという感覚。金を得る以外の努力目標の喪失。
- ・情報やサービス産業中心の産業社会及び格差社会が進み、画一的な価値観に縛られ目標なき日常、挑戦心、困難が生かせないために目標や気力の希薄化、ニートの増加。
- ・自己存在感や自己を必要としている役割意識がもてず生まれてきた意味や生きる意味、よりよく生きようとする自己価値観の喪失。

②真善美の精神、規則遵守や社会生活のしつけ、家庭・地域の教育力の喪失

- ・先行き不透明な変化の激しい時代を迎え、生き方に筋の通った精神や価値観のよりどころがなくなり、真・善・美・愛の精神を基に他者とよりよく共生して生きる指標の喪失。
- ・決まりや規則の無視、他者無視、礼儀、他者への心遣い喪失。
 - * 「悪いことをするな、天の神様が見ているぞ!」という教えの喪失。
- ・社会全体的な倫理観、ルール・マナー・正義感・他者への迷惑感の希薄化、悪事も捕まらなければよいという考え方、悪いことをしても反省せず他人に責任転嫁し、人が苦しんでいても平気である「罪の意識の希薄化と失われた良心、良心より金」。
- ・自分さえ良ければよい自分勝手な生き方、他者との共生や社会規範の低下。他者に対する心配りや譲り合いの喪失。手助けが必要な状況でも傍観しているだけ。
- ・愛情や慈しみの心・善悪のけじめなどを厳しく教育育てられることがなく、また、生き物を傷つけたり殺したり

することに慣れ、良心や罪の意識を喪失し情動が亢進していく。

③自由勝手な行き過ぎによる不満耐性(がまん)の喪失

- ・注意・叱られ経験が希薄で他者に責任転嫁する子ども時代、自己中心で不満耐性が弱くわがまま勝手、感情爆発型の神経。ちょっとした言動で鬱積感が極度になり爆発する → 自己抑制力と他者尊重意識の形成がされておらず感情抑制がきかない → 他者への憎しみの強烈化。不満をもつと突然感情が切れて爆発し歯止めが効かない。
- ・幼少期からの我慢や他者への迷惑など社会的なしつけの喪失。
- ・本能的な行動、残虐性、過激な性的情報刺激による性行動欲求の昂進。
- ・小さい時こそ我慢と他者への親切・思いやりのしつけが大切。我慢は人を強く優しくする。

④安心・相互扶助に結ばれた人間関係(安心)の喪失

- ・他者攻撃性の増大と孤立不安ストレス症候群 → 突如凶悪犯罪に走る現象。
- ・安心の生活は近所相互の連帯感・人々との日頃からのふれあいから生まれるもの。
- ・仮面人間関係、交友関係がすぐ変わる、仲間はずれにならないための表面上の付き合いだけの友人関係で心からは付き合わない。「親友」の死語化 → たこ壺社会。
- ・集団で欲求不満を無関係の人にぶつけ、エスカレートする攻撃性。
- ・他者への配慮やマナーをもたない“自己チュー人間”の増加。
- ・人がいじめられても何も感じない・助けない(情の希薄化、心の不感症化)。
- ・議論することを避け、当たらずさわらず「自分さえよければ症候群」。
- ・人間関係回避、たこ壺化した自己中心人間の増加(外界不感症)、孤立生活。
- ・家族・学校の先生という信頼関係の基盤の崩壊現象。時には自分さえも信頼しない。
- ・子どもの指導ができない教師、責任感の薄い子ども(子どもの的な大人)教師の増加、金や性などが大人のように高じてきている大ども(おども…大人じみた子ども)の増加。

⑤バーチャル経験の拡大と現実体験の喪失

- ・実感的理解のない知識知のみの認識。「感知一体」の真に解かり生きて働く知の喪失
- ・現仮混濁(現実と仮想世界とが判断できず本当の世界として認識される)、テレビやコンピュータゲームなどで

殺したり死んでも生き返ったりするものを見慣れてしまうことで、暴力、生命に対する認識・実感、倫理観、罪の意識や憐憫の情が薄くなる。

- ・現実との境界の認識が薄れ、実際に実行したいという欲求が高じ、自己をコントロールする判断力を失い実行に移してしまう現実混濁現象、自己抑制力や罪悪感の希薄化。
- ・感情爆発型鬱症候群や殺すことや残虐性への好奇心及び実体験願望の昂進。
- ・姿のない情報関連犯罪の増加、無差別被害 → コンピュータネット社会の影の拡大。
- ・ネット上のバーチャルな付き合い。自己の思いこみ感情が昂進し感情抑止が効かない。
- ・テレビ、雑誌、携帯、マルチメディア、インターネットなど間接知識により座しながら何の情報・知識でも得られる新もの知り人間が増加。
- ・汗して得る直接体験を通じた発見・感動・体験などが希薄化し架空の情報に踊らされる。
- ・知恵の働きや創造的機能・手の巧緻性などの低下。
- ・座したままでこと足りる室内生活、不行動人間化、感性的・身体的活動性の低下。
- ・競技スポーツのように競うものには感動するが、人々の心や暮らし行為、自然・芸術などを見て美や大切なことを感じる心の希薄化。

* これらの五つのマイナス現象の防止には学校における道徳教育や生徒指導、しつけや法の遵守といった教育が大切なことはもちろんだが、それだけでは決して十分な解決にはなりえない。なぜならば、このような行為をする者達は法や倫理よりも自分の感情中心の判断傾向が底流にあるからである。法や倫理や正論は現在では効力をもてない時代になっているとも言える。それは他者との関わりが希薄になっている中「自分の考えや行為を他者に規制されたくない、自分の感情のままに行為する」という自己中心的なものの考え方が多くなってきている社会風潮の中では当然の成り行きであろう。幼少期から一人の人間として自立して生きる力と社会の一員として他者と共に生きるふれあい、社会生活上のしつけが欠けているため「自分さえよければよい、注意されても聞く耳をもたない」という態度になるのは当然の結果とも言える。「夢と感動と勇気をもつこと、生活のルール・マナーは守れ、大人の注意は聞きなさい。我慢」というしつけと、手伝いやボランティア経験をさせ「自己貢献・有効感の喜び」を定着させる経験的教育が大切である。人は誰でも本当は生まれてきてよかったと思える有為な自己存在感や自己有効感、心の安らぎなどを

得たいと願っている。しかし、自分がこの世に生まれてきたことを他者が喜んでくれている大切な存在であることや自分の存在がなにがしか他者のために役立っているという実感、自分は劣等生ではなく他者に負けない夢と個性と能力をもっているという確かな有能感など、真の自己有効感や自己存在感(アイデンティティー)をもてずストレスや自己無能感、自己否定感情をもち続けている。自己中心の勝手な行為をしていながらも、同時に他者の自己中心的な行為に不快感情や恐れをもたされストレスを抱えている。自らがされたくない・感じたくないことは、他人との間や社会においてもしてはならないことは当然の理であることは頭では理解できても、美しいものや行為などに感動する心や、相手の心情を感じ取り他者と共感・共生していく構えなど、自己存在の有効感や心を感じ取る感性が育っていないから行為として改まりにくい。

人間は“心の動物であり、夢と大志をもち自己存在の意味を問う唯一の生命体”である。その判断の基は「多くの他者との関わり方の豊かさ、実体験による生きた知識・経験、感性の積み重ね」による要素が大きい。最近はそれが急速に希薄になってきている。

このように社会を取り巻く様々な問題の解決については、取り締まりや法律といった外面的な措置とともに「道徳による善の涵養、芸術による感性や美教育、科学の神秘・不思議などの教育による感性豊かな心の涵養」、「自己存在の有効感を実感させる体験活動やボランティア活動、他者と心を通わせられる会話、豊かな人間関係や共に実践・行動する機会の創出」などを学校・地域・家庭が一体となっていくことが有効となる。

3 「人生を創造的に生きる力を培う教育」が求められる

(1)「一回きりの人生をどう創造的に生きるか」の生き方教育を

人は誰もが一回きりの人生である。たった一回しかこの世に生まれてこず、一回しか死なない。この点については誰もが平等である。しかし一回きりの人生をどう生きるかという生き方の質はそれぞれに異なる。“人生は自分創りの旅”であり、どう創っていくかがその人の生き方である。

人は誰でも幸せに生きたいと願っている。例え学力が十分でなくても、失敗してもいろいろな問題を起こしていてもそれでよいと思っている人間はいない。本当の自分は違うはずだ、もっと価値ある人間のはずだ、もっとできるようになって認められたいと思っている。しかしそう思いながらもまた間違いをしたり失敗したり挫折したりして自分

に自信を失い本当の自分をさがすことをあきらめ、いずれ開ける未来の可能性にも目をつぶってしまっている自分の姿に気づかないでいる生徒もいるだろう。体験は人を創る。失敗や挫折、辛さなどを体験した人間は順風人生の人よりも苦しみの情がわかり優しくなれる。一回きりの人生を生きる上で無為・無駄なことは何ひとつない。みな価値ある生なのである。人皆たった一回しか生まれてこないということは、生まれてきたそのことにこそ価値がある。たった一回しか死なないということは、一回しかない「生」を自分としてどのようにより善く存在して生きるか、その営みにこそ価値がある。人は誰でも何かができる。その人でなければできない何かができる。それが個性・能力というものであり、生き方というものであろう。ならば「自分はこれをするために生まれてきたんだ」というものを見だし、伸ばし確かな自信をもって人生を創造していくことができるよう一人一人に応じて温かく指導・援助し、意欲と基礎力とより良い個性・能力を育むことが学校の役割である。

アメリカの教師ハンドブックには次のことが書かれている。

「この教室には未来の医者、月探険者、画家も作家もいる。実業界の大物も、未来が必要とする指導者たちもいる。皆、未来に大切な一人である……」と。

この言葉は、一人一人の子どもを「一回きりの大切な人生を、夢と可能性をいっぱいもってその実現を目指して生きる個性的存在」としてとらえ、その願いを実現できるよう温かく、根気強く指導・援助していくことが教師の使命であることを教えてくれている。

しかし個性とは思うままにしたいがまま自由にさせていけば育つものではない。人は生まれながらに何でもわかり何でもできるわけではない。教わったりまねたり体験したり、それらをヒントに新しいことを考えたりする“学習と挑戦”によって有能になっていく。そこに教育の意義がある。「自由にのびのびと育てる」ということは本能や感情のままにさせることではない。自分のよさを素直に発揮してより善く生きるための諸能力や態度(生きる力)を自ら求め学び身につけられるようにするということであり、自分勝手や独りよがりの個性ではなく他者と共に生き合う中でよさを発揮するという成熟した個性を育てなければならない。個性の発揮には自己規制力・自己責任も併せて求められる。学校はこの多様な個性や可能性をもつ子どもたちに、全教育活動を通して豊かな人間形成や生涯にわたり創造的に生き学び続けるための基礎づくりとしての教育、すなわち、豊かな知力と感性を備え、他者と共生しつつ創造的に生きていくことのできる真の個性・能力を培うにはどうす

れば良いかを教育課題とし、その研究・実践を進めていく必要がある。とりわけ子ども達が夢や自己存在感・有効感や自己実現の喜びをもって生きることができるよう、豊かな知力、自然・芸術などの美しさや誠実に生きる姿に感動し人の心を繊細・鋭敏に感じ取れる豊かな感性、自信がもてるだけの表現力・創造的思考力・技能、自己や物事を深く見つめより善い生き方を求める態度や判断力、そして他者の存在や心を大切にするための倫理観やマナー・基本的生活習慣などの育成に力を注ぐ必要がある。

(2) 生きることは学ぶこと、学ぶことは生きること(ヒューマナイズ・エデュケーション)―「教授中心の指導」から「夢実現への楽修指導」への転換を―

子どもたちは誕生以来短い人生の中で様々な行為を通して何でも学び吸収し、自己を見つめ自己の価値や能力の発見・伸長、ものの見方・考え方、人との接し方や共同生活の仕方、道徳的規範、情操など一番大切な多くのことを学習していく年代の大半を学校で過ごす。家庭・地域の教育ももちろん大切で不可欠だが、人生の大切な時期の大半を過ごす学校教育が子どもたちの人間形成・能力形成などに与える教育的影響力は非常に大きいものがある。

教師はやはり教育の専門家であり担うべき役割は実に大きなものがある。したがって、何よりも学校教育において中身を教育していく教師の在り方、子どもに対する見方・考え方、子どもに向かう日々の構えや言動、教育的信念や情熱などが大きく影響していくという間違いない事実を深く認識しその影響力の強さと質を痛切に自覚する必要がある。

その上で、では、学校は子どもたちが今を生きる上でいったいどのような意味があるのか。

「なぜ学校に行って勉強しなければいけないの?」という子どもたちにどう答えられるか?

もはや学校は子どもたちにとって行って学ばなければならない絶対的存在意義を失いつつある。

これまでの知識重視の画一的な教授指導は確かに社会からその必要を求められ日本に経済的・物質的繁栄というすばらしい成果を収めてきた。しかし同時に知育偏重による過度な受験競争から生じた学力という単一尺度による人間の評価観、受容的で自ら考え判断しようとしなない生徒の増加、学力の競争とそのプレッシャーにさいなまれ本来の人間らしい喜びや優しさ、感動する心などを見失ってしまったなどの人間性の破壊現象をはじめ様々な問題をもたらした。知識重視の画一的価値観、教授と受容という一方的構図による教育のつけが今ここに噴出しそのガスに苦しめら

れているのが目の前にいる子どもたちである。これでは豊かな人間形成などは絵に描いた餅に等しくなってしまう。これからは変化の激しい世界の中で日本が様々な面でリーダーシップを発揮していくことを求められ、自ら創造的に世界に貢献していかなければならないとともに、生涯にわたり自己実現を目指し自ら意欲的・創造的に学び続ける意欲・態度、能力が求められる。

生きることは学ぶことであり、学ぶことはより良い自分創りの営みである。学ぶことは小さな脳のほんの一部が働くことだが、大志をもち学ぶことで得られる世界や可能性は宇宙くらい大きい。学ぶということはすごいことである。

これからは国家・社会や企業に有為な人材を育成する教育ではなく、一回しかない生を一人の個性的・社会的に生きる人間として自分の人生を自立的・創造的に生き、喜び、共感共生し合うことのできる意欲、知力、感性、精神、諸能力をもった人間の育成を図る教育、いわば真の豊かな人間性を育てるための教育の人間化(ヒューマナイズ・エデュケーション)という質的転換が求められている。具体的には教師がもっている知識・技術などを一方的に教え授ける教育(教授教育)から生徒が自ら課題をもち意欲的に学び解決・創造し、自ら能力を伸ばしていく学びを楽しむ教育(楽修)へと転換を迫られている。生徒のもっているものをいかに引き出し伸ばしそれを生徒自身にいかにも有為に意味づけていくかという教育が必要なのである。この教育では結果よりも学習のプロセスが特に大切になる。そのプロセスで何を体験し、何を感じどう考え、どのような能力を身につけ自己決定して生きるか、その生き方の自覚と為したこと学び取ったことが自分自身にとっての答となる。欧米諸国では中学生・高校生が哲学や文学を学び人間理解を深め、地球を視野に考えるとともに、芸術に親しみ感動を味わい心を豊かにし、いろいろなよさや個性をもつ多様な仲間とふれあいながら自他が共に生きる創造的な生き方を考え進路や生き方を自己決定している。それに比べ日本の生徒は知識はたくさんもっているが、自他の個性の尊重や、豊かな人生を築くための意欲・洞察力、創造的に生きることについて自己挑戦していく生き方などについては未熟であると言われる。したがって今、生徒自らが豊かな知力と感性を備え様々な体験の中から大切なものをアクティブに獲得し自己決定・自己挑戦し、その結果に対して謙虚に自己責任をもつ「自立の学習(真の生きる力)」が必要なのである。

4 子どもの多様な個性と可能性を^{ひらく}拓く教師の姿勢

(1)人は皆異なる未来の可能性と生き方をもっている

人間は心や感性、考え方や能力、興味・関心、身体的特徴、生活経験など一人一人皆異なる。皆異なるということとは皆異なる未来と可能性をもっているということである。この世に価値の順位づけを受けて生まれてきた者はいない。能力はそれぞれ異なっても生きる価値は同じであり平等である。「雑草」などと価値のないもの扱いや能力が低いからといって見下したりぞんざいに扱ったりしてはならない。松尾芭蕉が「よく見ればなすな花咲く 垣根かな」と詠んだように雑草にも一つ一つ他と異なる独自の価値をもつ存在としての確かな名前があり、この世に生まれそのものでなければ咲かせられない美しい命の花を咲かせ懸命に生き抜き次代へ命をつなぐ使命をもって生まれてきている。

私たちはともすれば「雑草だから」と見向きもしなかったり粗末に扱ったり、平気で踏みつけたりし過ぎてはいないか。表向きには美しく見えず一見大して有能には思えない存在の命や可能性を軽視してはいないか。小さな目立たない命にも懸命に生きる姿がある。

人間は誰でもすべて平等な価値と意味をもって生まれてきている。この世に生命をもって存在する以上必ず「存在する必要」があって生み出され、その生涯を全うしようと努力をしつつ懸命に生きている。人みな平等にそれぞれの美しい命の花を咲かせる力をもっており、雑草のような子どもに思えても若い生命の輝きと我々よりもはるかに広がる可能性、未来を創るフューチャークリエイターとして底知れない力を秘めている。未来は間違いなく子どもたちの手の中にある。その子どもたちがいずれ来る未来への夢をもち、そのよりよき実現に向けて精一杯真摯に生き、情熱を傾け、感動の喜びをもち創造的に生きる目標とそれを実現していく個性的で確かな力を培うことが教育の究極の目的であろう。

<実際例 1>「生きることと学ぶ意味」を次の新聞の投書から考えてみよう。

「勉学の目的は点数とは無関係」

私は高校卒業後、金型工として勤務しました。その後、腕を磨いて独立し小さいながらも会社の経営者になりました。現在十数人の社員を雇用し日本の「ものづくり立国」の基盤を支えています。

私は学校時代成績が悪く学力のないダメな生徒とされてきました。しかし、早くから技能を磨き、経営者とな

ることを夢見て努力してきました。

本来、社会や人生において勉学や学力は多種多様なものだと思います。人間には様々な能力や個性・目的があり社会も多様な人材を必要としています。

しかし、文部科学省や教育界の関係者は点数的価値観ばかり重視し、人間や社会に対して大変狭い考えしかもっていないように思えます。

私の経験に照らし、勉学の目的とはよい点数を取ることではないと断言できます。勉学とは社会に貢献できる人間になるために、問題解決力や創造力、人間性などを育成することだと思います。(平成17年3月3日 読売新聞気流欄投書 51歳会経営者より)

<実際例 2>「生きることは学ぶこと、学ぶことは生きること」

また一方、小学生の頃から進行性筋ジストロフィーという難病にかかり20歳という短い生涯を懸命に生きたI君は次のような詩を残している。

たとえ短い命でも
生きる意味があるとすれば
それは何だろうか？
働けぬ体で一生過ごす人生にも
生きる価値があるとすれば
それは何だろうか？
もしも人間の生きる価値が
社会に役立つことで決まるなら
僕たちに生きる価値も権利もない
しかしどんな人間にも差別はなく
生きる資格があるのなら
それは何によるのだろうか？

(注)「教育と医学」1989年12月号

彼I君は14歳の時に自分の病名と生きられる可能性を父親に初めて聞いた。「20歳までは生きられるそうだ。でもそのうち良い治療法が開発されるかもしれない」と聞いた。その時彼は「ああやっぱりそうか」とぼつんとひとこと言い、しばらくしてから「そうだとしたら、明日からどう生きることが問題だね」と言った。彼は自分の病名を知り余命が短いことを感知した時、丸2日間自分の部屋で閉じこもり考え込んだ。父母はそのショックの大きさがわかっているだけに何も言ってやれなかったと言う。

I君はその間に上記の“心の叫び”を書いた。そして、そ

の翌日から突如猛勉強を始め、疲れると陶芸をし絵を描いて心と体を癒したという。彼が大きなショックや悲しみにも負けず、突如として猛勉強を始めた意味はどこにあったのだろうか？

父母は「勉強なんかしないでいい！体がよくないのにそんなに勉強ばかりしていたらもっと悪くなってしまふよ。もっと楽しいことを自由にやりなさい！」と言った。

しかしその父母の言葉にI君は「僕に残されたあと少ししかない時間で自分がどれだけ生きてがんばれるか、何ができるか試したいんだ。僕にとって勉強することは生きることへの挑戦なんだ！もう旅行にも連れて行って欲しくていい、どこにも行かなくていい。これからの残された時間、僕が自分の力でどれだけのことか試したいんだ！お父さん、お母さんどうか僕のやることをじっと観ていてほしい、僕が自分の力で一生懸命生きること応援してほしい！」と言って、毎日毎日猛勉強をしたという。

そして……20歳を半ば過ぎたとき、医者の予測通り短い生涯の命を閉じた……。

I君が短い人生を自分の為したい目標をもって主体的に懸命に生き、学び、考え、生きることにも夢をもち自己挑戦している自分の意思と為したことを毎日毎日両親に話したという。彼の生き方に父親は「息子は短い命の可能性を受け止めなければならないことの悔しさ・悲しさと戦い、不自由な体と短い命であっても懸命に学ぶことで生きている限りは自己の可能性を少しでも高めよう、そのことで懸命に生きている有効な自己を確かめようとすることに賭けた。その姿は私に人間がどう生きることが大切なのか、夢と目標をもって懸命に生きることがどれほど美しく尊くすばらしいことかを実際にやり通して教えてくれた“人生の先生”だった」と語り、I君が残された短い命を精一杯悔いの無いように生きようと懸命に生きた生き方のすばらしさとその経過をこと細かくノートに書き記していた。

更に「人間の生きる価値とは、何ができたか、どれほど長く生きたかで決まるのではなく、いかなる宿命や運命や状況に置かれようともその中でどう精一杯自分を生かし切ったかという生きる姿勢において決まる。学ぶことは何の手段でもなく生きることは学ぶこと、学ぶことは生きることであり自分の命を燃焼させることの行為そのものだったのでした。私はこの時に筋ジスのわが子からその生きる姿勢を通して人間としての本当の生きる意味と真実を生きる価値を教えられた」と語っている。

父親は、息子であるI君が自分の短い人生を肯定的に受け止め創造的・自己挑戦的に積極的に生きられた理由とし

て次の三つを挙げている。

- ① どれほど長く生きたか何ができたかではなく、どう生きたかという生きる姿勢に人間の価値があること
- ② 精一杯生き抜いたという満足感、生の充足感
- ③ 懸命に生きた彼の全存在を全面的に認め、心の底から共感し人生の良き友として互いの出会いを喜び合える理解者の存在

このI君の例はまさしく生きる価値は皆平等であることや、生きる姿勢や生き方がその人の生を価値づけるのであり、その上でそれぞれがより良く生きるに必要な諸能力を自らの意志に基づく真摯な努力によって身につけ、それぞれの個性を生かしつつ共感し合い、支え合い、共に学び合っている姿勢が大切であることを教えてくれている。

(2) 人は皆 生まれてきた存在価値と個性をもっている

一人の人間一本の草木でも今ここに生きているということは、地球上に最初の生命が誕生して以来約38億年もの時空を超えて営々と懸命に生きて受け継がれてきた生命が今も一人一人の肉体に宿って活動しているということである。生命は生命有るものからしか生まれてこない。現在の最も高度な科学の粋を集めてもたったひとつの新たな生命をも創造できない。自然の営みとは人知をはるかに超えたすごい力をもっている。そのことの前では人間はただただ謙虚になるしかない。力の強弱、賢愚、能不能、身分、貧富などは人間の存在価値とはまったく関係のないこと、ひとつの生命体、生きる存在という点に集約されて等しく価値ある存在であることを実感せざるを得ない。そのように一人の命・存在は決して一人だけで成り立っているものではなく、気が遠くなるほど永い間の生命の営みと進歩・発展の上に成り立って今輝いている。それら38億年の命の重さを受け継いで生きている一人一人の子どもは皆生まれてくる意味と価値があって生まれてきている。それらの命と発展の可能性はまた永遠に受け継がれていくべきものである。したがって、一人一人は38億年もの命を背負い、それを次へと発展させるだけの価値ある存在として皆その人らしい価値ある能力の可能性・資質を備えている。また、それらの能力・資質の差や違いはその人の人間として生まれてきた存在価値の軽重を意味するものではない。ひとつしかない命をもって生まれ、人間として独自の考えと心をもって存在しており誰でもその人らしいよさと夢をもっているという点で皆等しく大切にされるべきである。その夢や可能性、資質・能力を引き出し開花させ、よさを見だし励ましてより良く生きる力を育てることが教師の役割で

あり、引き出すきっかけとなる教育作用が、教えること、助言すること、支援すること及び人間的な豊かな感化を及ぼすことである。さらに、開花させるには学習の成果を発表する機会が与えられること、その成果・価値が一人一人に応じて適正に認められ、評価されることが必要である。これらの教育作用は一人一人の子どもたちに向ける教師の心の目と感性によって発動される。

教師はこれらのことを念頭に置き一人一人の子どもの意欲を湧出し、個性と可能性の夢を豊かに拓き自己充実感と自己有効感をもたせられるよう、教師自らの識見と感性を磨き授業の確かな実践と改善の研究を積み重ねることを大切にしていきたい。

5 教師も子どもも同じ人間として立つ

今から1,400年も前に聖徳太子は次の言葉を唱え広めている。

「人みな心あり。心おのおの執るところあり。かれ是とすればわれは非とす。われ是とすれば、かれは非とす。われ必ずしも聖にあらず。かれかならずしも愚にあらず。ともにこれ凡夫のみ。是非の理、たれかよく定むべけんや。相共(あいとも)に賢愚なることみみがねの端なきがごとし」(「日本の名著2 聖徳太子」中村 元 編集中央公論社)

まさに教師も子どもも同じ一人一人の独自の存在であり、心も考え方も違い、よさも至らなさもある。しかし、どちらの方が偉いとか正しいとかという絶対の違いはない。役割と経験と専門的的力量・識見が違うだけである。子どもの学習意欲を刺激して引き出し、一人一人の子どもが自らの学びが十分に成就でき自分の学習に成就感、自己有効感、進歩感などを実感でき、目標をもって主体的に学習に取り組めるようにする必要がある。

そのためには、一人一人の子どもの個性を大切にしながら感性という「心の目と聴心器(心を感じ取る力)」を働かせて子どもの願いや心を感じ取り一人一人の子どもに沿って、教えるべきことは教え、見守ることは見守り、支援することは支援し、学習への取組の意欲やよさ、成果などを目ざとく認め、ほめ励ましていくことが何よりも大切である。

また、子どもは日々成長・変容しており社会の変化にも教師以上に敏感に対応している。子どもの方が素直で謙虚に考えていたりすばらしい気づきや発想をしたり、純真な心をもっていたり優れた知識・能力をもっていたりすることも多くある。

教師もまた聖徳太子の言う「相共に賢愚なること(人は誰でも賢さと愚かさ、正しさと間違いの両方の面をもってい

る)の意味をかみしめ、子どもの学びからも大切なものを発見し学び取ろう、共感しよう、反省しようとする“相共に学ぶ”姿勢と柔軟性を持ち視野を広め指導力を磨いていくことを心がけたい。その姿勢はまた日常の全教育活動におけるふれあいの中で感性による教育“感化という無為の教育”となって子ども達に影響し身に付いていく。

* 教育は、教師や親たちという「人」と、育ち手という「人」との響き合いによって成り立つ。

人と人との響き合いが「人間」であり、人と人が手をつなぎ合う中に美しい日が昇る。

“美は人を感化する”と言われる。しかし“悪貨は良貨を駆逐する”とも言われる。

悪貨を放任してはいけな。どちらの価値観を強くもつかで人間性が決まる。

真の教育は“良貨(真・善・美の価値観と、よき未来を

創造していく良質で豊かな感性・知・創造意欲)の育成”を目指すことにあることを今一度しっかりと認識していこう！

教育に“遅き…”はない、「気づいた時・夢をもった時が“学び時”」である。

今からでよい。教師も生徒も夢の実現に向かって真に有効な学びを築いていこう！

参考文献

- 1) 慶応大学医学部発刊 「教育と医学」 1989.12月号
- 2) 中央公論社発刊 「日本の名著2 聖徳太子」 中村 元
- 3) 読売新聞 気流欄 2004年
- 4) 東京都板橋区教育委員会発刊「生活指導の手引き」 1984年
- 5) ノーベル賞フォーラム 1998年 江崎玲於奈博士
- 6) 財団法人 モラロジー研究所発刊 「身近なモラルの実行」
- 7) 心のノート 文部科学省発刊
- 8) アメリカ ウィスコンシン州教育者手引き